

〈新収品紹介〉

鑑貞筆瀟湘八景図画帖

大和文華館にご好意を寄せて下さる方がたから、これまでも貴重なご愛蔵の美術品のご寄贈を受けてまいりました。このたび、室町時代の水墨画家鑑貞(かんてい)の「瀟湘八景図画帖」が、当館に寄贈されましたので、読者の皆様に紹介し、寄贈者のご好意に感謝の意を表わしたいと思います。

ご寄贈者のお名前は、小村つぐ美様といい、長年東京で表具のお仕事をされている方です。この鑑貞の作品が、どのようにして当館に寄贈されるに至ったか、小村様のお手紙を引用させていただき、その経過と作品について紹介したいと思います。

過日、小村様より次のようなお手紙が、当方に送られてきました。「(略)私は東京の表具師ですが、父が死亡して幾年か経ちましたが、父の残した書画が少しありました。お客様からお預りした物ではありません。私も多少日本画を習いましたので興味があり、色々と調べましたが、此と思う物はありませんでした。でも一つだけ巻物には少し興味を持ちまして、その事で御尋ねしたいと思ったのです。その巻物は、墨画で相当古い様で、表紙などはボロボロで、又表紙の裏は銀の雲に、金泥の秋草が描いてあります。八景が続いていますが、その一面一面に印(〈註〉白文方印「鑑貞」)があり、一面の寸法は丈31センチ、巾23センチです。私の知りたい事は画の本物とか、ニセ物とか、その様なことではな

く、ただ奈良法眼鑑貞(〈注〉了雅という鑑定家の極が添えられている)と云う人は、一体どの様な人で、何日頃の人物なのか知りたいのです。(略)」という内容でありました。

私は次のような返事を小村様にいたしました。「(略)実物を拝見しておりませんので、具体的なことは申し上げられませんが、鑑貞については、私が知っていることを述べます。この鑑貞という画家は、室町時代の人で、彼の遺品は山水図、人物図、花鳥図など十数点知られています。一部はアメリカやヨーロッパに渡っています。その画風から推して、十六世紀前半頃に活躍した画家のようです。不思議なことに、彼の作品には「鑑貞」という印章が捺されているだけで、落款もなく、また年代を知る手掛は何もありません。同じ時代の文献には、「鑑貞」の名前は見えません。ただ、興福寺多聞院の僧英俊が記録した『多聞院日記』(天文13年(1544)6月2日)に、カンテキという画家が屏風絵を描いたという記事があります。このカンテキが鑑貞その人かどうかはわかりませんが、時代としておもしろいところです。江戸時代の『本朝画史』という本に、はじめて、彼についての記述がでできます。それによれば、鑑貞は法眼に叙せられ、墨溪と号し、南都唐招提寺総持坊の律僧であると書いてあります。現在の研究では、彼は墨溪とは別人で、また大徳寺の画家蛇足

(上) 漁村夕照図

(下) 江天暮雪図

とも違い、専門的画家ではなく、むしろ素人画家的なところがあります。絵の上手、下手ということではありません。彼の画は簡樸で淡雅なところがあり、温か味のある画風です。山水図に描かれた人物の表現には、何か縹渺としたところがあります。これは室町水墨画の中では、特異なことで、それがまた彼の魅力でもあります。南都の律僧といういい伝えはその意味でなかなか興味深いものがあります。(略)」と。

そして後日、小村様より次のようなお手紙を頂戴いたしました。「(略)たいした物でなければ、自宅の本棚の隅にでもおき、値打のあるものならば自宅の隅に埋めてしまうのはもったいない事ですので、出来得れば、貴館の隅にでも置いて頂ければ幸いと思っています。(略)」と。後、小村様ご夫妻が当館までわざわざこの作品をご持参下され、拝見いたしましたところ、まぎれもない鑑貞の真筆で、非常に驚きました。これは鑑貞の作品の中でも、特に出来のいいもので、それ以上に瀟湘八景(鑑貞自身の解釈)が全部揃っていることは、美術史的に価値があります。八図の中には、はじめてみる草体のやわらかい表現の山水図があつたり、また祥啓風の山水図(写真上)や彼の最も得意とした雪景山水図(写真下)なども含まれています。彼の画風を知る上で、貴重な資料であります。

現在、この瀟湘八景図は、本来の状態である画帖に改装しているところです。この新しい名品は、「日本の墨絵」展で初公開いたし



ますので、是非ご覧下さい。おわりに、小村つぐ美様のご好意に、更めて厚くお礼申し上げます。(林進)

季刊 美のたより No.44

昭和53年 10月15日

発行 大和文華館